

2 布良——画家の聖地を 守る人びと

[上] 青木繁ら4人が滞在した小谷家住宅。明治20年代に建てられたと考えられ、当時の漁家の特徴を今に残す館山市指定文化財でもある。

[左上] 青木らの面倒をみた小谷喜録夫妻。

[左下] 現当主の小谷栄さんとトシさん夫妻。

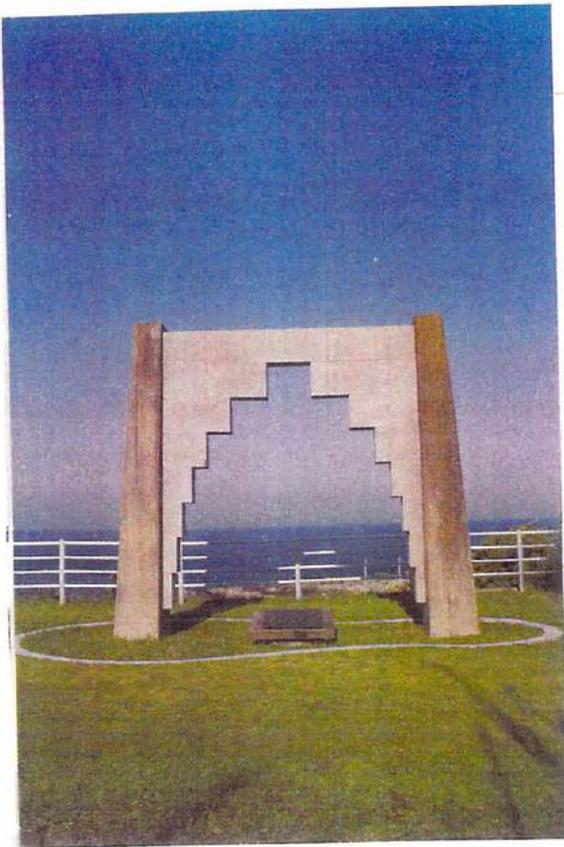
東

京駅から内房線特急に揺られて約2時間。終点の館山駅で降り、さらに車で20分ほど南下すると、眼前に小さな漁村が見えてきた。ゴールデンウィーク明けの5月中旬なのに汗ばむような陽気で、南国にきたようだった。空気もうまい。

明治37年7月、東京美術学校を卒業した青木繁は、福田たね、坂本繁二郎、森田恒友とともにこの地を訪れ、ひと夏を過ごした。画学生たちが青春の1ページを過ごした海、といってしまう



特集
青木繁
ゴーメン画家の
愛と孤独



没後50年を記念して昭和36年に建立された《海の幸》記念碑。除幕式には福田たね、蘭童をはじめ、多くの著名人が出席した。

ばそれまでだが、ここでの体験をもとに描いた『海の幸』が、洋画で初の重要文化財に指定された（昭和42年）こともあり、布良は近代日本洋画史にとって特別な意味を持つ場所となっている。その歴史を今に語り継ぎ、ゆかりの場所の保存に奔走する人々を訪ねた。

明治37年7月15日、東京の霊岸島（現在の中央区新川）から蒸気船に乗った青木一行は、翌朝館山で下船。茶屋に入って氷水で喉を潤し「下」、柏屋旅館の紹介で布良の小谷喜録方を紹介してもらった。小谷家は江戸時代から続く漁家で、明治時代には漁師頭や救難所看守を務めるなど、村の世話役を代々引き受けてきた家柄。海難事故で夫を喪った妻子を一時的に預かったり、再婚の世話をしたりと、普段から面倒見が良かったのである。喜六は東京から来た4人の画学生を1ヶ月半

ほど滞在させた。その家は、今も住時のまま残っている「右頁右」。

「うちの母が6つのときに、絵描きさんがおいでになってね、障子で仕切った奥の間で、何かやっている。親からは絶対に開けちゃならん、って言われていたそうなんだが、あんまり静かなものだから、母は気になって仕方ない。障子にそと穴をあけて覗いてみると、女の人が裸で立って絵を描いてもらっていて、それはもう、強烈な記憶だったと言っておりました。私が母から聞いた話は、それが全部ですね」

と、この家で育った小谷トシさんは言う。久留米の青木の生家も残っているが、あちらは近年建てなおされたもの。だがこの6畳間「右頁左」は、青木がいた時代から基本的に何も変わっていない。夫の栄さんは入婿で小谷家に来たため、詳しい事情は知らない

が、かつて小谷家には青木の下絵が残されていたらしい。だが関東大震災のせいで雨漏りしてしまい、濡れてしまった書類ごと処分してしまったのだとか。勿体無い話である。

布良出身で、エッセイストの山口栄彦さんは言う。

「うちの姉が小谷家の近所に嫁入りしたんですけどね、その家のばあちゃんと言うには、小谷家に滞在していた絵描きの何人かを世話してやったそうなんです。すると毎朝、やたらに威張った男が小谷家からやってきて『おーい、赤痺。いくぞー』って声をかけて、一緒に海に出かけていったんだそうです。その威張った男というのが、おそらく青木でしょうね」

確かに、6畳間2室に男3人女1人はなんだか不自然。青木は坂本や森田を追い出したのだろうか。想像は膨らむばかりだが、ここ布良でも青木の「オレ様の言動」がしっかりと語り継がれているところが可笑しい。

さて、青木の名前がこの地で再び聞かれるようになったのは、滞在から半世紀以上たった昭和30年代半ばのこと。布良の阿由戸浜にユースホステルの建設計画が立ち上がったとき、館山市の市会議員、嶋田繁さんが敷地内に「青木繁記念碑」を建てることを提案した。

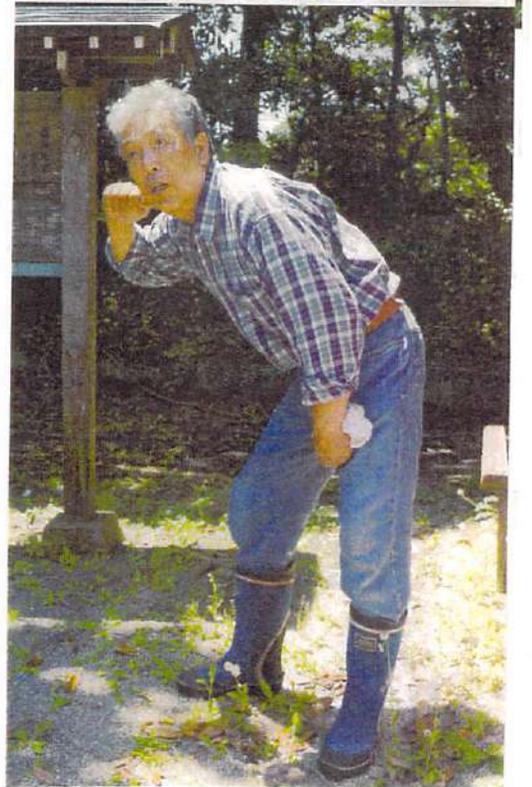
施設を訪れた若者に、夭折した画家を知ってもらおうとの考えだった。ところが漁師町の人々はほとんど青木繁の名前すら知らず、市にも予算がない。だが当時の田村利男市長は地元出身とあって、熱意があった。福田たね、蘭童の承諾を得て賛助会を結成。画家の坂本繁二郎や熊谷守一、辻永（日展理事長）、富永惚一（国立西洋美術館長）、河北倫明（美術評論家）などを発起人として募金を集め、建設費60万円を捻出した。設計はル・コルビュジエの翻訳



福田たね《五十年前の追憶》 南房総への旅行体験を、昭和37年に回想して描いたもの。栃木県芳賀町総合情報館蔵



[上] 布良の沖合には鬼が瀬と呼ばれる浅瀬が広がり、座礁事故が絶えなかった。この近辺の岩礁を青木は描いている。
 [中] 布良崎神社の大神輿。明治時代には、ふんどし姿で担いでいたという。写真提供=島田吉廣



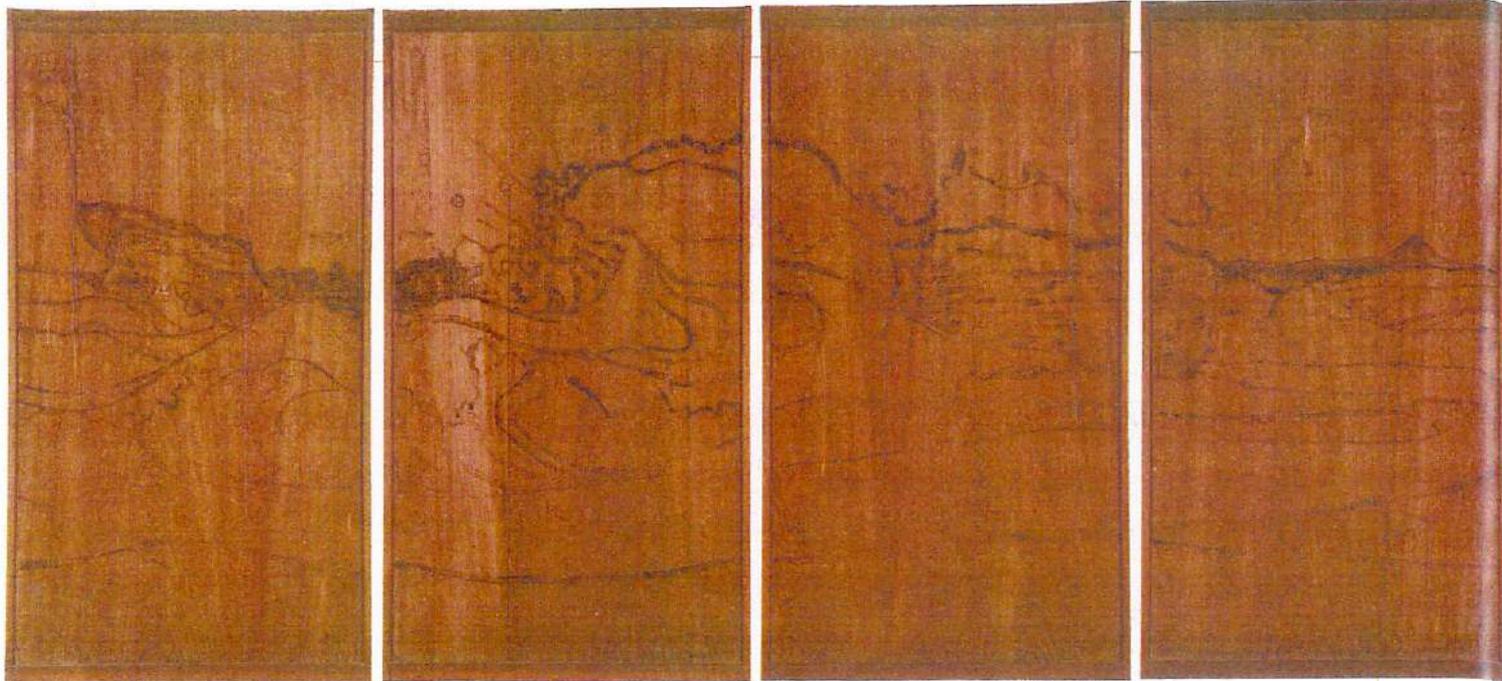
「神輿の前方はこうやって担ぐだろ、青木の絵で鯨を背負った男のポーズは、まさにこれさ」と自説を述べる、布良漁業協同組合長の島田吉廣さん。

で知られる東大教授の生田勉。館山ユースホステルの設計を手がけたので、同敷地内の記念碑もお願いした形だ。昭和36年12月、記念碑は無事建立され、碑文にはこう刻まれた。(この碑は画伯を敬慕し、その芸術を愛する者たちがあい寄り、没後50年を記念してゆかりのこの地に建立したものである)ところが、である。平成に入り、館

山ユースホステルは営業不振を理由に閉鎖されてしまう。県は国に土地を返却するのだが、青木の記念碑も取り壊して更地にせよと、命令が下ったのだ。耳を疑う話である。税金を1銭も使っていないため役所に記録がなく、無断で建立したのでは、というあらぬ疑いまでかけられてしまった。地元の区長が署名運動をして、館山市が国から敷

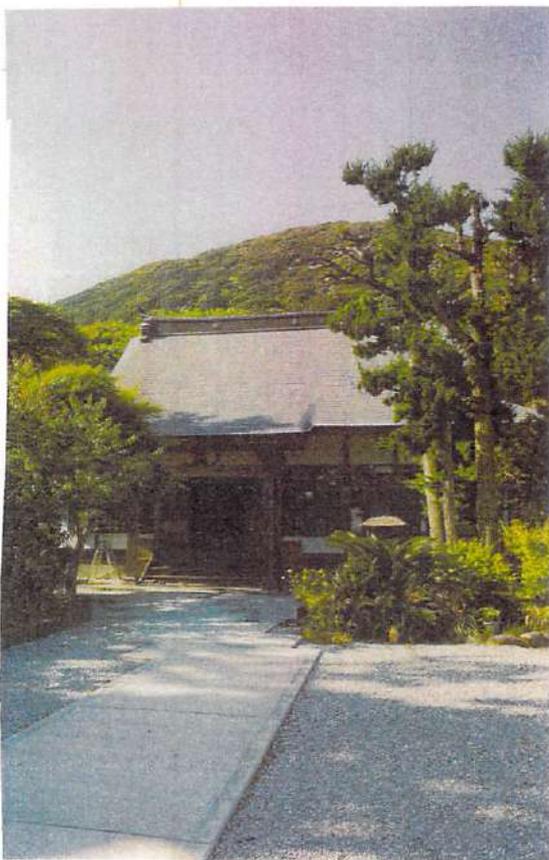
地を借りることで、なんとか取り壊し中止が決まったのは、平成10年のことであった。
 青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会の池田恵美子さんは言う。「記念碑の保存活動が地域活性化運動に発展して、今度は小谷家住宅を保存しようという話が持ち上がったのが6年前。小谷さんが家を記念館にしても

いいと英断されたのです。個人宅を保存することに、周囲の理解を得るのに時間がかかりましたが、3年前に保存会が発足。募金を集めて、将来的には小谷家住宅を解体修理し、青木が来た当時の状態に戻して《海の幸》記念館として一般公開を目指します。小谷夫妻には管理棟を造って移り住んでいた。予算は数千万円だが、現在の募金額ではまだまだ足りない。だが同時に、小谷家住宅を保存する運動は美術界でも起こっていて、昨年には画家や研究者など、100名以上の有志が集まってNPO法人青木繁「海の幸」会を結成。こちらも募金活動を続け、館山の保存会と協働して小谷家住宅の保存を目指している。
 半世紀前は青木の名前すら知らなかった海の男たちも、今では《海の幸》を漁村文化の象徴として誇りにしてい



明治38年、青木とたねは館山を再訪し、圓光寺に滞在。この際、青木が坂戸に焼け釘で描いた《海景》。水平線右手に富士山、波飛沫の左側に伊豆諸島らしきものが描かれている。各183.0×100.0cm

圓光寺本堂。建物は平成に入ってから再建されて、往時の面影はないが、「本堂脇の建物の中2階に青木とたねが滞在したと伝えられています。当時は住職不在だったのかもしれませんが」と現住職の池田英乘さん。



る、と池田さんは言う。

「保存会初代会長の吉田昌男さんが、『海の幸』を見て面白い指摘をされました。漁師は『板子一枚下は地獄』といって、漁が終わって命を持って帰れるのはすごいことなんだ。その時の喜び、『ああ、帰ってきたー』。女房に会える」という歓喜の叫びが、裸の男性たちに象徴されていると。私はそれを聞いて、心が震えました。これは漁師だからこそ言える解釈ですから」

この地で江戸時代から4代続く船大工の棟梁、豊崎栄吉さんもこう語っている。

「明治30〜40年代は、布良のマグロ漁の最盛期で、ここに来れば白いおまんまが食べられて、しかも金を持ってウチに帰れると言われました。けれども遭難も多く、明治35年から10年間で20人が亡くなったと記録にあります。

漁師たちも命がけ、船をつくる私ら大工の責任も大変重かったのです」

布良漁業協同組合長の島田吉廣さんのユニークな説も紹介しておこう。

『海の幸』の構図は、神輿を担いでいる男衆そのものですよ。ほら、前の男は前傾姿勢、後ろは直立しているでしょ。しかも明治の頃だと、神輿を担ぐ男衆はふんどし姿だったはず。ちょうど青木が滞在した小谷家のすぐ隣には、布良崎神社がある。夏祭りは8月1日だったから、まず間違いなく見ているはずだね。小谷喜録は地元の世話役だから、若い青木らに神輿を担がせたんじゃないかな。でもね、この神輿は館山で一番重くて、800キロもある。40〜50人で担ぐんだけど、普通の体力の男なら2分ともたないし、激しく揺らすものだから、担ぎ棒が激しく肩に当たると血が出ちゃう。好き

な人の傷を早く治すために、

おしろいを塗るのが、布良流のバレンタインデーってやつなのよ。青木とたねも、案外そんなことやってたんじゃないのか」

《海の幸》誕生から107年。若き日の青木たちは、今も布良の人々の中で生きつづけている。

特集
青木繁
ゴーン開家の
愛と孤独

青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会
TEL & FAX 0470-22-8271 aoki-shigeru.awa.jp
青木繁「海の幸」会
TEL & FAX 044-945-5473 uminosac.web.fc2.com